阪神淡路大震災における子どものストレスとケア活動の成果

---１年半後の調査から評価する---

山田冨美雄

大阪府立看護大学看護学部

キーワード：ＰＴＳＤ、CPTSD-RIj、地震災害、心のケア、チェックリスト

阪神淡路大震災ほど、被災した人々の心の傷と、その癒しについて語られたことはない。震災直後に精神科医や臨床心理士が、各避難所で心のケア活動を開始した。またボランティアたちも、被災者を勇気づけようと各種イベントを企画し、教師たちは学校で震災教育を試みた。はたして成果はあったのか、何が最も効果的だったかを検討する目的で、震災から１年半後に、産経新聞大阪本社と共同で調査した結果を報告する。

調査は1996年６月の最終週に行った。対象は、小学校５・６年生と中学生に限定した。西宮市内の小中学校に加え、激震地の神戸市東灘区の小中学校、ならびに強震地の神戸市北区の小学校と垂水区の中学校の計６校で、有効回答数は1263（男666、女594）であった。

調査用紙として、アルメニア地震（1988）の１年半後に、米国の精神科医Pynoosたちが被災児童のケアのための基礎資料を得るために使った「子供版PTSD反応指標」の日本語版に、被災の度合いなどを聞く質問を付け加えたものを使った。この反応指標は、21項目の質問群からなり、フラッシュバック、驚愕反応、不安、回避反応、過覚醒、疎外感、罪悪感、それに身体症状など、ＰＴＳＤの症状を「まったくない」、「ときどき」、「いつもある」の３件法で問うものである。その合計得点からPTSDの反応の強さが判定できる。Pynoosらの報告によると、この反応指標を用いた調査によって、震源地に近いスピタクの子どもの90%が、地震発生から一年半後に強いPTSDの症状を示したという。この調査の目的は、彼らと同じ調査用紙を用い、彼らの調査と同時期の１年半後に、阪神大震災被災児のPTSD症状の有無と程度を評価することであり、今後のケアの必要性と方向性を示唆するものと位置づけることであった。

結果と考察

図１に、子ども版PTSD反応指標の得点分布を示す。分布の山が15～20点で２つに分かれること、女児が男児よりも得点が高いことがわかる。

学年差

原版の基準に従って、PTSD反応の強さを、11点以下を「なし」、12～24点を「軽度」、25～39点を「中等度」、40～59点を「重度」、60点以上を「かなり重度」の５つに分けた。図２に、この５分類の比率を、学年毎・男女別に図示する。「かなり重度」に判定される児童は皆無であり、「中等度」以上の比率は小学生女児で30%、同男児で16%、

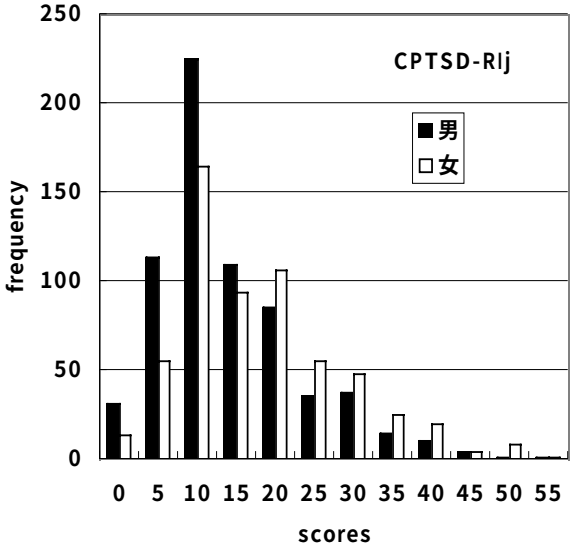

図１　CPTSD-RIjの度数分布

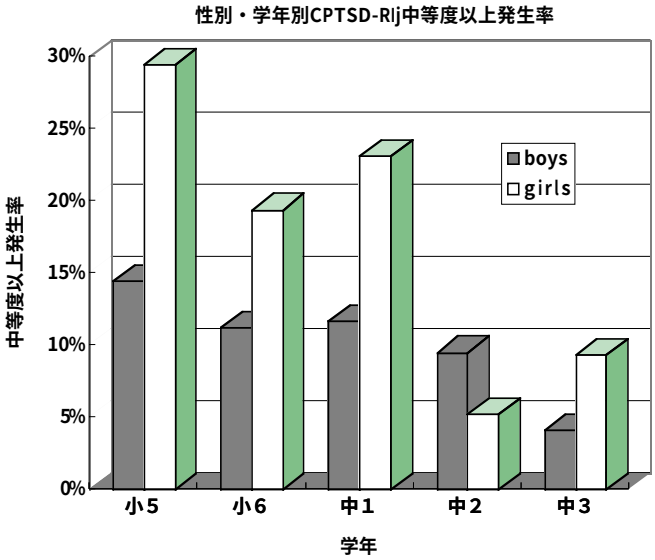

図２　男女別・学年別PTSD中等度以上の発生率

中学生女児で27%、同男児で9%に上ったが、いずれもアルメニア地震と比べて極端に少なかった。心のケア隊の成果の一端がみえる。

学校差

図３に、学校ごとのPTSD徴候を図示する。我々が震災初期から介入した西宮市内の小中学校のPTSD徴候が少ないことがわかる。我々の介入の効果とみなしたい。また、東灘区の小中学校が強い反応を示している。被災度の最も少ないはずの北区の小学校で強い反応が出ている。これは激震地区から十数名の転校生を抱えているにもかかわらず、当校はこれまで心のケアを受けていないのが原因と考えられる。

恐怖・喪失体験

図4に、本人の負傷、家族の負傷、家屋の損傷、避難所生活の期間、転校経験、それに地震で失ったモノの違いによる、PTSD反応が中等度以上と判定された児童の比率を示す。

本人の負傷　地震で何らかの負傷をした児童は、男女とも約12%に達した。負傷児は、無事だった児童の約2倍、強い反応が認められた。

家族の負傷　男女とも35%の児童の家族が負傷した。家族の負傷は女児の反応に強く影響し、男児の２倍強い。

家屋の損壊　約10%の自宅が全壊して住めなくなったが、自宅全壊男児の５人に１人、女児の３人に１人は今でも強い反応を示す要ケア児であることがわかる。

避難所生活　地震直後に避難所で寝泊まりした経験を持つ児童は37%に上る。プライバシーを気にする女児の場合、避難所生活が長期におよんだケースでは強い反応が認められた。

転校経験　転校経験を持つ児童は22%に達し、一時転校の経験を持つ子の反応は強い。転校して今の学校に来た児童については、女児の反応の強さが気になる。

喪失体験　どんな大切なモノを失ったかを自由に記載してもらったところ、30%の児童が１つ以上の喪失体験を記載した。２つ以上記載した児童のうち要ケア児は、男児で４人に１人、女児の半数に達した。

まとめ

被災後１年半が過ぎ、被災者の生活もほぼ元通りに回復しつつある。またPTSD徴候を示す重度の児童はアルメニア地震に比べて少なかったものの、女児など、まだ強い災害ストレス反応を示す子どもがいる。特に家が壊れてケガをした児童や、避難所で不自由な生活をしたり、転校先に馴染めなかった経験をもつ児童の反応は依然強い。科学的な評価とともに、根気強いケア活動の必要性が示された。

（やまだ・ふみお）

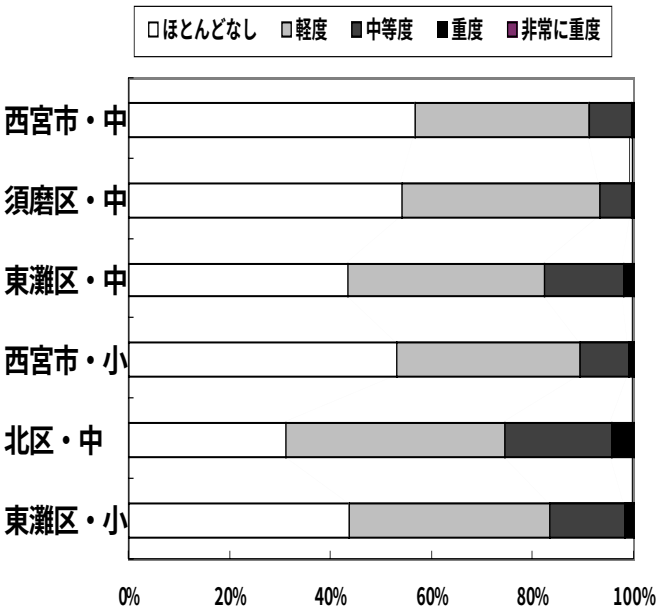

図３　学校別CPTSD-RIjの結果

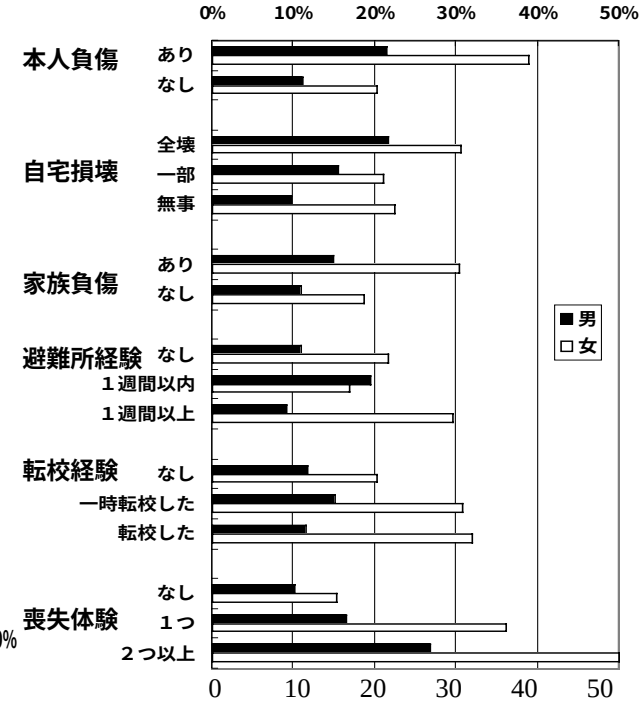

図４　被災度別CPTSD-RIj中等度以上発生率